

つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 131号 2010.8.25 発行 社会政策研究所

ロボットやお芝居など、各地の新しい動きをお伝えします。【kobi】

NEC、コミュニケーションロボット「PaPeRo」が認知症者の自立生活を支援するシステムに採用 - コミュニケーションロボット「PaPeRo」が国立障害者リハビリテーションセンター研究所の「対話型情報支援システム」に採用 -

日経プレスリリース 2010年8月24日

NECのコミュニケーションロボット「PaPeRo (パペロ)」が、国立障害者リハビリテーションセンター研究所（所在地：埼玉県所沢市 所長：加藤誠志）が開発した、認知症者の自立生活を支援する「対話型情報支援システム」に採用されました。

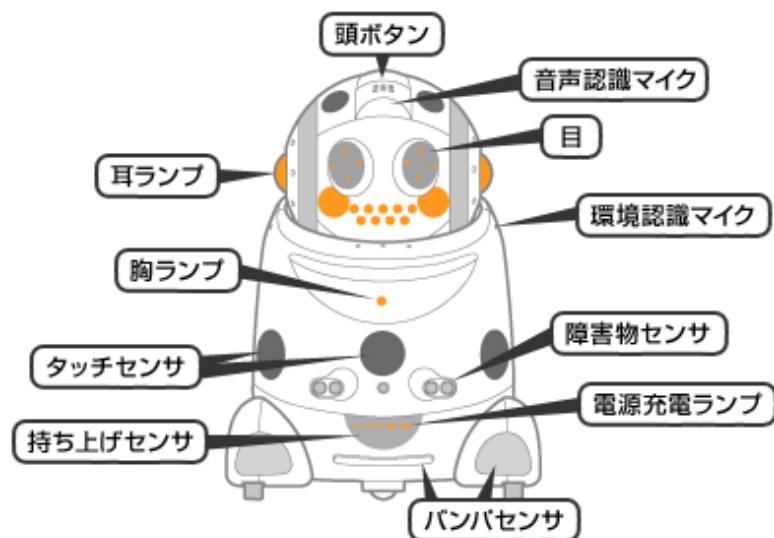
対話型情報支援システムは、コミュニケーション機能を持つロボットとの対話を通じて、注意力や理解力が低下した認知症者に効果的に情報を提供したり、日常生活行動を促して、自立生活を支援するものです。

同システムでは、PaPeRoの音声認識機能や音声発話機能を利用して、以下の4つのプロセスから構成される対話機能を提供します。

- (1) 対話を開始させる「注意喚起」(発話例：○○さん)
- (2) 支援内容を予告させる「先行連鎖」(発話例：誰か来たみたいですよ)
- (3) 情報を知らせる「情報伝達」(発話例：玄関に行ってみたらどうですか)
- (4) 「対話の終了」(発話例：よろしくね)

国立障害者リハビリテーションセンター研究所は、同システムの実証実験を昨年10月より実施しており、システムから提供される情報によって、外出前にトイレを済ませる、ヘルパーを玄関で出迎える、薬を決まった時間に飲む、などの行動を促し、認知症者の自立生活支援に役立つ可能性があることを実証しました。

PaPeRoは、認識技術・センサー・カメラなどを備えたコミュニケーションロボットであり、様々なアプリケーションと組合せて使うことで、ユーザーに情報をわかりやすく提供したり、子供やペットの見守りシステムに応用できるなど、人と情報システムとを



優しくつなぐインターフェースとして活用することが可能です。

NECは今後も、PaPeRoのコミュニケーション機能をいかして、子供から高齢者まで、誰もが簡単に利用できる情報システムの提案を行ってまいります。

PaPeRo のご紹介

papeRo

見た目はかわいく、小さなロボット。
むじゃきにコミュニケーションする機能で
人と社会をまるく大きくつなぎます。



PaPeRo R500 の機能・特徴

お話しする（音声認識・音声合成）

話しかけるといろいろな国の言葉で挨拶をしたり、時間を教えてくれたり。名前を呼ぶと返事をします。初めて話しかける方のために、話しかけ方のコツを練習する機能もあります。声をかけて、前進後退や回転させることもできます。



さわると（タッチセンサ）

おなかにさわるとくすぐったがったり、頭をなでると喜んだり。9つのタッチセンサが内蔵されていて、さわるところによってさまざまなリアクションをします。



クイズやゲームをして遊ぶ（各種コンテンツ）

モノマネやだじゃれで人を笑わせたり、ダンスや歌を披露します。なぞなぞやおみくじで遊んだり、また案内役のガイドで、ことわざや県名をあてる物知りクイズ、花や果物の名前の順番を記憶する記憶ゲーム、鳴き声から動物等の名前を当てる音クイズで遊ぶことができます。



顔をおぼえる（顔認識）

PaPeRo R500 は顔をおぼえると(30人まで登録可能です)。顔を見分けて名前を呼んだり話しかけてきたりします。



伝言を伝える（伝言機能）



伝言をたのむと、相手の顔を見分けて伝えてくれます。

ひとりでお散歩する（自律移動機能）

人とおしゃべりしていないときは、センサを使って障害物をよけながら気ままにお散歩します。歩き回るのに適さない場所で使うときは、移動を制限する足動作禁止を設定することができます。



自分で充電する（自動充電機能）



バッテリー残量が少なくなると、自分で充電ステーションにドッキングして充電します。充電完了時には自動的に充電ステーションからでてきます。(PaPeRo R500 が充電ステーションを見つけられる範囲は、環境によりますが約3m以内となります。)

離れた場所から操作できる (遠隔アシスト機能)



離れた場所から、PaPeRo R500 がお客様とスムーズにコミュニケーションできるようにアシストできます。無線 LAN を使ってパソコンから PaPeRo R500 をかんたん操作。親しみやすく直感的な遠隔操作画面で、その場でテキスト入力したセリフを PaPeRo R500 に話させたり、あらかじめ設定

しておいたセリフを話させたりできます。

カスタマイズできる (カスタマイズ機能)

PaPeRo R500 に好きな名前をつけたり、利用シーンにあわせて、話しかけたりさわったりしたときのリアクションを設定することができます。(15の認識語についての音声認識反応、8種類のタッチ反応など。)



宅間孝行、セレソン史上最高に泣ける...「くちづけ」大阪公演PR

スポーツ報知 2010年8月24日



劇団「東京セレソンドラックス」を主宰する俳優・宅間孝行(40) = 写真 = が23日、大阪市内で、作・演出・出演する舞台「くちづけ」の大阪公演(9月22～26日、シアター・ドラマシティ)をPRした。

知的障害者のグループホームを舞台にした物語で、宅間が以前読んだ十数行の新聞記事がモチーフだが「この事件をお伝えするとネタバレになってしまう」と苦笑い。すでに上演した東京公演では「セレソン史上最高に泣けた」と観客の反応は上々。出演は金田明夫(55)、加藤貴子(39)ら。

感想ブログ：先日、R字から「男泣きしませんか？」と誘われて、「東京セレソンドラックス」という劇団の「くちづけ」を見てきたんですが、予想以上に泣かされました。しめっぽい涙じゃなく、前向いて歩き出したくなるスッキリした泣き系なので、ヤロー同士のサシ呑み前とかにもいいし、勿論デートでも使えるよ。相手と本音で、もっとコミュニケーションとりたくなんじゃないかな。飾らない自分が出しやすくなると思う。

でも、一番ヤバイのは娘さんがいる父親ですね。後ろの席のおじさんは号泣というより、嗚咽してました。うん、そうなるよね・・・やっぱ。ボクに娘がいたら、同じ状態になる。きっと、そう思う。ネタバレしてもアレなんで、詳しいことは避けますが、知的障害者達が主人公なんですよ。テーマ的に、なんかを押し付けるような展開かと思いきや、全くそんな重たさは無く、とても自然体というかさりげなく、自分も登場人物のひとりとなって、そこにいるような感覚で話が進んでいく。TVなどでは突っ込みにくい切り口にズバッと踏み込んだかと思えば、軽い笑いに変えて鮮やかに次につないでいく。テンポいいし、展開が全く飽きませんね。

舞台は、せいぜい年に1、2回くらいしか行かないまるっきりAWAYのボクですが、東京セレソンって知ってるヒトの中では、かなり有名な劇団なんですね。この新宿御苑の劇場も、200席くらいが満席でした。みなさん「泣き」に来てるので、映画館とかよりこっちは素直に入ることができます。

道：障害者を地域生活へ 新施策、施設の事業転換支援 / 北海道

毎日新聞 2010年8月24日 北海道版

障害者の生活の場が施設から地域へ移るのを促そうと、道はグループホームなど地域での生活の場を用意したうえで定員を減らす障害者施設に交付金を出す「入所施設事業転換促進事業」を新たにスタートさせる。事業費は2年間で約10億円。国の施設整備補助よ

りも要件を緩和しており、この間に1000人の入所者が地域生活に移ることを目指す。

【堀井恵里子】

「施設から地域へ」は障害者施策の流れだが、09年の道内の施設入所者は1万1545人。道福祉局によると、人口10万人当たりの比率は全国平均の約2倍に上る。

このため道は、11年度末までに福祉施設入所者(05年10月で1万2055人)を約1700人減らす目標を設定。昨年10月までの退所者は約1500人で順調に推移しているように見えるが、約1000人が新たに入所しているため、差し引き約500人しか減っていない。経営面の問題や、施設を出てからの受け皿不足などから、施設の定員削減も進んでいないのが現状だ。

交付金は、グループホーム運営やアパート暮らしの障害者の支援など、施設側の事業の一部転換を後押しすることで、地域生活への移行を促すのが狙い。5人以上の定員削減をする場合が対象で(1)削減数に応じ1人当たり100万~200万円(2)削減率に応じ1施設当たり100万~500万円 - - の合算額を交付する。

グループホームなどの施設整備には国の補助事業もあるが、新築や改築に限られている。道の事業は、空き店舗や廃業した旅館などを買い取って転用することも認めるなど、使い勝手をよくしたのが特徴。地域の活性化や雇用創出の効果への期待もある。また定員を減らす施設には、4人程度の相部屋を個室化するなど、環境を改善するよう求める。

申請に必要な事業転換計画は、地域住民や関係市町村などが参加する協議会を作り、意見を聞くのが前提。今年度分は今月下旬から募集を始めており、12月まで受け付ける。地域での生活の場は、福祉施設退所者のほか養護学校卒業生らにも必要なため、道福祉局は「定数削減だけでなく、地域ニーズに応じた受け皿を作ってもらえれば」と話している。

障害者自立、道が支援...事業転換の入所施設に

読売新聞 2010年8月25日

道は、福祉施設に入所する身体・知的障害者が地域社会で自立して暮らすことが出来るよう、福祉施設側が入所定員を削減し、グループホームなどへ事業転換を図る独自制度を新設した。施設だけでなく地域住民らも事業転換の計画策定にかかわるのが特徴。10億円の予算規模で2011年度末までに、障害者1000人程度の自立を目指す。

道によると、身体・知的障害者の入所施設は約210か所あり、入所者は1万1545人(昨年10月現在)。08年に道が行った調査では、入所者の約3割が施設以外での生活を希望していた。

制度の対象は、リハビリや職業訓練などを受けることが出来る入所型の更生施設や授産施設。定員の削減数に応じて、1人当たり100万~200万円(加算金あり)を道が施設側に支給し、入所者が地域に出た場合の居住地の確保など支援策を講じてもらう。

事業転換を希望する施設は、入所者の家族や地元住民、自治体職員らで作る協議会を設置。定員の削減数や地域に出る障害者への支援方法などを盛り込む事業転換計画を策定する。今年度分は、12月まで申請を受け付ける。

交付金の使途に制限はなく、協議会が自由に用途を決めることができる。障害者の生活の場として、グループホームの新築や賃貸アパートの確保の資金にしたり、就業の場として空き店舗の購入費用に充てたりすることも可能だ。道側も、福祉や経営などの専門家を協議会に派遣して、計画作りを後押しする。

道は今月18日、交付金の交付要綱を総合振興局などを通して福祉施設に通知した。保健福祉部の中野孝浩・地域福祉担当局長は「障害者が地域で暮らすことは、当事者の自立を促すだけでなく、施設職員のノウハウを地域に還元出来る。雇用を創出し地域の活性化



にもつながる」と話す。

施設建設計画、障害者ら点検 兵庫県が条例改正へ

神戸新聞 2010年8月25日

兵庫県は、障害者や高齢者が利用しやすい施設の整備基準を定めた「県福祉のまちづくり条例」を改正し、急速な高齢化に対応したバリアフリーの整備を進める方針を固めた。具体的には、施設の計画段階で障害者らのチェックや助言を受けることを努力義務とするほか、施設のバリアフリー情報をホームページ（HP）で公開するよう求める。その上で、条例に従わない場合の立ち入り検査や罰金の対象を拡大し、厳格な態度で臨む。

全国でも珍しい試みで、県は本年度中の条例改正を目指す。

計画段階でのチェックは、多くの人々が利用する公共施設や店舗などの新・増改築や改修が対象となる。障害者や専門家が計画の内容を点検し、改善点を施工主に指摘する仕組みで、完成後の施設の管理方法や介助対応なども聞き取り、認定書を交付する。

障害者や建築・福祉分野の専門家を養成し、チェック側のアドバイザーとする。ただ点検に強制力はないため、新たに施工主に活用を促す仕組みを検討する。

バリアフリー情報の公開義務付けは、既存施設を含めた1万平方メートル以上の映画館や店舗、飲食店 2千平方メートル以上の官公庁 50室以上のホテル など。未整備の施設や設備の情報も、併せてHPで公表を促す。

これまでは基準に不適合な場合、建設できない施設を2千平方メートル以上としてきたが、改正条例案ではすべての官公庁や学校、福祉・医療施設、100平方メートル以上の店舗やホテルなどに拡大。改善命令に従わない場合の罰則規定も適用する。

県では、8月末から県民の意見を聞くパブリックコメントを実施し、本年度中に県議会に改正条例案を提案する。県は「障害者らの声を直接反映させ、安全・安心なまちづくりを進めたい」としている。（井関 徹）

県福祉のまちづくり条例

県が全国に先駆けて1992年に制定。官公庁や学校、福祉・医療施設、100平方メートル以上の店舗やホテル、21戸以上の共同住宅などを「特定施設」とし、高低差がない通路や幅80センチ以上の出入り口、階段の手すり設置などを義務付けている。

夢も詰まった段ボール発売 障害者工房がデザイン 福岡

朝日新聞 2010年8月25日

販売が始まる4種類の段ボール箱 = 福岡・天神

障害者が集まる工房で制作した段ボール箱を流通させる試みが始まった。贈り物などを詰めた箱にも夢を持たせようと、動物などのデザイン画を配した。25日から福岡・天神のアントレ大丸福岡で販売を始め、販売益は工房などに還元して障害者の自立支援に充てるという。

段ボールを販売するのは、アーティストや芸術・文化系のNPO法人でつくる「だんだんボックス実行委員会」。建築家で九大芸術工学研究院准教授の鵜飼哲矢さんもメンバーに加わる。

「冷たく、殺風景だ」。茶色の段ボール箱を目にするたび、鵜飼さんはこう感じていた。今年3月、鵜飼さんは福岡市在住の彫刻家、鎌田恵務（けいむ）さんにその思いをぶつけた。鎌田さんも同感で、「愛の箱を作ろう」と盛り上がった。

2人は芸術活動の振興に取り組むNPO法人「匠ルネッサンス」（福岡市南区）の代表、



神崎邦子さんに話をもちかけ、今月上旬に実行委を発足させた。名の頭に付けた「だんだん」は、西日本の一部地域に残る「ありがとう」という意の方言と、段ボールの読みをかけた。

デザインを担当したのは、鎌田さんと交流があった「工房まる」(同)と「アトリエ ブラヴォ」(同市博多区)、「クラフト工房ラ・まの」(東京都町田市)。段ボール製造会社とも商談が進み、大小4種類にライオンやサル、人間、家具などのデザイン4種を配した段ボール箱が誕生した。価格も200~350円と手ごろだ。販売を前に神崎さんは、「まだ緒に就いたばかりだが、『だんだん』と大きく育てていきたい」と話す。

だんだんボックスの段ボール箱は、9月14日に福岡市中央区のアクロス福岡で開かれる建築家、安藤忠雄氏の講演会場でも披露される。問い合わせは匠ルネッサンス(092・525・0991)へ。電子メール(info@dandanbox.com)でも受け付ける。

壁に「可能性」障害者アート 「理解の場」NPO企画 和歌山・みその商店街飾ろう

読売新聞 2010年8月25日

外壁に絵が飾られるカフェ&雑貨店「絵本ぐるぐる」(和歌山市美園町5で)

多様性を理解し合えるまちづくりを進めようと、NPO法人「わかやまNPOセンター」は、JR和歌山駅前の「みその商店街」(和歌山市美園町5)を舞台に、障害を持つ人の芸術の可能性を見いだす「エイブルアート」に取り組んでいく。まずは商店街に飾る壁画を募集し、「商店街がエイブルアートの普及の場になるとともに、街の活性化にもつながれば」と期待している。(虎走亮介)

エイブルアートは、奈良市の財団法人「たんぼぼの家」の播磨靖夫理事長が提唱。障害を持つ人のアートを「可能性の芸術」ととらえ、障害者と健常者が芸術を通して、理解し合う新しい共同社会を目指す。

同センター職員が播磨理事長と交流があり、エイブルアートに共感。和歌山でも障害のある人の可能性を発見、発信しようと、「エイブルアートで優しいまちづくりプロジェクト」を市に提案し、採用された。

壁画は応募作品の中からコンペティションで選ばれ、「絵本ぐるぐる賞」と「わかやまNPOセンター賞」の2作品が採用される。同商店街のカフェ&雑貨店「絵本ぐるぐる」とNPO「顔晴(が)んばるヤングサークル」の事務所入り口付近に原画を引き伸ばして掲げる。

選ばれなかった作品も11月6~12日に同商店街で開催されるエイブルアート展覧会で展示される。

コンペは10月にあり、元支援学校美術教諭の辻朋子さんと和歌山信愛女子短期大学講師の岡崎ゆみこさんが選定委員を務める。事業を担当する同センターの児玉夏希さん(30)は「想像もつかない色遣いや技法など、エイブルアートには考えさせられる作品が多く、今から楽しみです」と話している。

応募は9月30日まで(必着)。対象は県内在住で障害のある人。作品は四つ切りサイズでキャンバスは不可、平面に限る。「絵本ぐるぐる」などに置いている受付票を添付すること。応募方法の詳細は、同センター(073・424・2223)へ。

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック

